

でんでら通信 第百三十二号 令和七年三月

## 春の永代供養会

三月八日(土) 午後二時より

今回は、本山からの巡教師であります岡山県 仏土寺  
住職 馬場道隆師にご法話いただきます。  
どうぞ万障お繰り合わせの上ご参詣ください。

## 坐禅会

三月二十九日(土) 十時に坐禅会を開催します。  
みなさんのご参加をお待ちしております。

## 花まつり

四月八日はお釈迦様のお生まれになった日です。  
今年も門前に花御堂を祀り甘茶供養をいたしますので、  
みなさまどうぞご参詣ください。

## 彼岸に憶(おも)う

ようやく三月に入り、日中の日差しには温かさを  
感じられるようになってきました。うれしい限りで  
す。日本海側や東北の方では、まだまだ雪が残って  
おり毎日が大変だろうな、と察します。それでもこ  
の地方でもまだまだ朝晩は寒い日があります。みな  
さまどうぞお身体ご自愛ください。

さて「暑さ寒さも彼岸まで」といいます。今月には春のお彼岸がまいります。

そんなお彼岸のお話が、過去に本山発行の「花園」に掲載されていしたので紹介させていただきます。  
(2010年3月号、地藏寺住職 姫野晴道師「彼岸に憶う」より)

大変古い話で、しかも私事で恐縮だが、彼岸が近づくといつも懐かしく思い出すことがある。

もう四十数年も前のことになるが、当時、妙心寺の管長をしておられた古川大航老師が「特請授戒会」で拙寺にこられた時の話である。その時既に、95歳になっておられたが、大変お元氣な御様子で、挨拶に参上した私に「新命さん、あんた嫁さんはおるのかね?」といわれるので、「はい、おります」と答えると、重ねて「そうか、じゃあ彼岸というのはどういう意味か知っているか?」と聞かれたが、咄嗟(とつさ)のことでもあり、言葉は知っていても詳しい意味などわからない私は、正直に「知りません」と答えた。すると、管長様は「お前さんが嫁さんの気持ちになり、嫁さんがお前さんの気持ちになる、それが彼岸ということだよ」といわれて、色紙に「転」という一字をその場で揮毫(きごう)して下さった。「転」とは、普通は「ころぶこと」「倒れること」という意味だが、仏教語としては、「何事でも、かたくなに自分の立場に固執することなく、ぐるりと廻って反対側の立場に立ってみる」という意味をもっている(これはずっとあとになって解ったことだが...)。こちら側から見てカッカと腹の立つ事柄でもぐるりと廻って相手の立場に立ってみれば、なるほどそう

だったのかと笑って受けとれることも沢山あるし、対人関係の感情問題など全てそうだといっても過言ではない。

仏教ではこの世の中を娑婆(思いどおりにならないところ)というように、悲しみや苦しさが人生の実相(すがた)といっているが、それとても同じことで、自分の側からばかりみて、それに間違いのないと思ひ込んでしまうから、やりきれない絶望に陥るわけで、それをひっくり返して考えれば、そのやりきれなさがそっくりそのまま明るい楽しさに変ずることもある。仏教では、そのようにひっくり返すことを「転」といい、それがわれわれの生活の中で極めて大切な生き方だと教えている。

それを実際に生活の中に生かす道は、その「転」の作用は専ら信仰からでくるすばらしい智慧の働きであることに気づかせていただくことにあるという。「転」をそこまで深めて受けとった時、悲しみや苦しみのすべてが広大無辺の仏の恩寵(おんちよう)としてよろこべる世界が開けてくるのである。

自分の中にある自分を「自己(じこ)」、他人の中にある自分を「他己(たこ)」という。おたがい、自分の中に他人を觀、他人の中にも自分を觀ていくという深い思いやりと、一度立場を変えてみるという眼(まなこ)の方向転換が彼岸に到る道ということであらう。

怨は怨を以て消すべからず。怨は怨まざるをもつて消ゆるものなり 釈尊

(怨みを怨みで返しても消えない 怨みを捨ててこそ消える)